ヒロヒト批判　（1）

# 恨みと憐みをこめて

日野　善太郎

昭和も五十年、戦後も三十年、区切りのよい年だというので、昭和史とか、天皇制とかが、賑やかにマスコミに取沙汰されている。ヒロヒトの訪米が、その傾向に拍車をかけているようだ。

それはしかし、五月の節句だから柏餅を食べたりするのに似ていないこともない。或いは祭りの日にだけかつぎ出される神輿のようだと言ってもよい。私には、どうもお祭り騒ぎめいて見えるのだ。

だから、こういう時期に、天皇制またはヒロヒトについて書くことは、私のようなヘソ曲りには、照れ臭いためらいがある。この風潮を少し離れた処からながめ、鼻の先に冷笑を浮かべて沈黙していた方が、ヘソ曲りには似つかわしい態度のように思ったりもする。

そう思いながらも、こうしてペンをとることになったのは、天皇流行りの風潮が、いつの間にか、特にヒロヒトの訪米前後を中心として、一つの新しい伝説を、まことしやかにつくり出そうとしているからである。

思えば、その伝説は、第二次大戦の末期に大日本帝国の上層部が、ポッダム宣言の受諾と無条件降伏を決意したときから準備されていたものかもしれない。いや、たぶん、その通りであろう。

天皇ヒロヒトは元来、平和主義者であり、開戦は彼の意志ではなく、終戦は彼の功績であったとする伝説がそれだ。そればかりではない。その伝説の故に、ヒロヒトは人類の最も尊敬に価する人物である、という評価を神話がかったヴェールにつゝんで、つくり出そうとしてい



る。

こうした伝説と評価は、ヒロヒト訪米の時期に大急ぎで創作されたのではなく、これまでも、おりにふれて、宮内庁の役人、保守的な政治家、権力に迎合する歴史家などの口から、しばしば語られてきた。

それによると、ヒロヒトには全く戦争責任はないということになり、ひどい曲学者などは、だからヒロヒトは戦争裁判の被告に指名されなかったのだ、と、理屈の通らぬことをぬけぬけと言って、恥じるところもない。

戦争責任は厳密に言えば、参加したすべての人に、大なり小なり、それぞれの質と量によってある。ヒロヒト一人、それをまぬかれる筈はない。まして彼は、大日本帝国の、神にもひとしき最高主権者ではなかったのか。

いかなる意味でも、言い逃れは許されぬ筈の戦争犯罪人が、平和への貢献者に変身するトリック創作の作業は、訪米を目前にしたヒロヒトが、米人記者のインタビューに答えたとき、どうやら完結したようである。

以下、しばらく、そのインタビューに即して述べることにしよう。

インタビューは、「ニューズウィーク」誌九月二十九日号に発表された、クリッシャー同誌記者とのもの（二十一日か、それ以前に行なわれたらしい）と、同二十二日に行なわれた在日外人記者団とのものと、二回にわたっている。テレビで放送されたのは前者であろう。以下の引用で（A）とあるのは前者、（B）とあるのは後者である。

インタビューの内容は、整理すると、天皇制一般と、ヒロヒト自身の問題、特に戦争責任に関する問題の二つにわけられる。まず、その戦争責任から考えよう。

ヒロヒトは次のように言っている。

「戦争終結の決定は私自身でくだした。首相が閣内の意見をまとめられぬまま私に意見を求めてきたからだ。私は私自身の意見を述べ私の意見に従って決定をくだした。開戦時の場合は内閣が決定を行なった。私はその決定をくつがえすことが出来なかった。私はこれは日本の憲法の規定に合致することだったと信ずる」（A）

「私が（真珠湾攻撃の）軍事作戦に関する情報を事前に受けていたことは事実だ。しかし私はそれらの報告を、軍司令部首脳たちが細部まで決定した後に受けていただけだ。政治的性格の問題や、軍司令部に関する問題については、私は憲法に従って行動したと信じている」（B）

これらの言葉には、一かけらの責任感もない。ほんの

少しでも責任を感じているために言い逃れようとしているのでなく、まったく責任を感じていないから、こんなことが言えるのだとしか、思いようがない。

天皇の権限は、開戦時と終戦時では違っていたのだろうか。そんなことはない。帝国憲法によれば「日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス（第一条）」「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ（第三条）」であり、「天皇ハ陸海軍を統帥ス（第十一条）」「戦ヲ宣シ和ヲ講ズルノハ天皇」（第十三条）だったのである。主権は天皇にあり大臣は天皇を補佐するものにすぎない。天皇は絶対の大権保持者であった。

その天皇ヒロヒトが今になって「作戦計画は細部まで軍が決定したもの」とか「開戦は内閣が決定した」とか、ぬけぬけと言い出すのだ。しかも、その決定をくつがえすことが出来なかったのは「憲法に合致すると信じている」というのだ。

ヒロヒト自身にとっても、「最も悲しかった思い出」（A）であり「昭和の五十年間で最低の出来事」（B）だったという戦争を始めたのは軍部と内閣で、終らせたのはヒロヒトだというのだから、彼はまったく戦争には責任がないばかりか、平和の貢献者の美名をほしいままにすることになる。しかし「天佑ヲ保有シ、萬世一系ノ皇統ヲ」ではじまり、「帝国ノ光栄ヲ保全セムコトヲ期ス」で結ぶ、あのオクターヴの高い文章でつづられた宣戦の詔書は彼の名によって発せられたものであった。

その詔書と真珠湾の戦果が、当時の多くの日本人をどれだけ感動せしめたか、今からふりかえってみれば想像を絶するものがある。その十二月八日朝、千代田城前に土下座して伏し拝んだ人たちが、あとを絶たなかったという事実や、次に列挙する数氏の言葉は、その感動の表現として素直に受け取ってよい。

「あの十二月八日の朝、感じたことを一言で言いますと、ざまぁー見ろです」（辰野隆）

「生きているうちにまだこんな嬉しい、こんな痛快な、こんなめでたい日に遭えるとは思わなかった。この数日と言わず、この一、二年と言わず、我等の頭の上に暗雲のごとくおおいかぶさっていた重苦しい憂うつは十二月八日の大詔渙発とともに雲散霧消した」（長与善郎）

「戦勝のニュースに胸轟くを覚える。何という巨きな構想・構図であろう。アメリカやイギリスが急に小さく見えて来た。われわれのように絶対信頼できる皇軍を持った国民は幸せだ」（青野季吉）

「戦争より恐しいのは平和である。……奴隷の平和より戦争を！」（亀井勝一郎）



「何なれや心おごれる老大の毫傑国を撃ちてしやまむ」（斎藤茂吉）

ここに私は、特にファナティックな右翼愛国主義者の言葉ばかりをえらんで並べたとは思わない。たとえば青野は曲りなりにも社会主義思想の持主であり、ともかくも運動にたずさわった経験の持主であった。ここには例としてあげなかったが（大急ぎで書いているため例をさがす時間がなかった）、おそらく戦前のアナキストの中にも、同じような感慨を持った人物が居たに違いないと思う。それほど、これらの言葉は、当時の日本人の一般的な気持を代表する例と言えるのではないだろうか。

当時は支那事変と称ばれた宣戦なき戦争が中国大陸でねばりつき、いつ果てるとも知れぬ泥沼化の中であえいでいたし、一方では日本の侵略主義への国際的非難が高まり、国連脱退とか、日独伊三国協定とかいう強がりのスタンドプレイはあっても、日本は国際的に孤立していた。長与善郎のいう重苦しい憂うつとは実にそのことをさしている。右を向いても左を見ても、大日本帝国は、ニッチもサッチも行かなくなっていたのだ。

真珠湾の戦果と宣戦の詔書は、そんなわだかまりを一挙に吹きはらう一種の痛快事にはちがいなかった。腹立ちまぎれに茶碗やコップを投げ割って胸のつかえを下げたり、見ず知らずの人に喧嘩を吹っかけ、いきなりポカリとやって痛快がるのと、どこか似ていないこともないというような痛快であった。それが軍艦マーチの勇壮な旋律にのって、正義の戦いのような錯覚をよんだのだ、と言ってもいいかもしれない。

しかしながら、その感動はそういう痛快とは別のところにもあった。天皇を現御神とし己れをその赤子とする明治以来の国民感情が宣戦によって爆発的昂奮を呼び起されたのである。

「詔勅をきいて身ぶるいした。……

天皇あやうし。

ただこの一語が

私の一切を決定した。

身をすてるほか今はない。

陛下をまもろう。」（高村光太郎　暗愚小伝）

「その時、「海ゆかば水漬く屍」の奏曲が風のように流れはじめた。みんな、首を垂れていた。この悲痛勇壮な曲は、どんな日本人にも、心の底から愛国の情を呼び起さずにはおかない。……自分でも、何だか国の為に死にたくなった。」（山田風太郎　滅失への青春）

「滅失への青春」は山田の戦中日記で、引用したのは十七年十一月二十八日の項である。開戦の日のものでは

ない。けれどもこうして高村の詞句と並べてみると「海ゆかば」という音楽の効果が判ると思う。つまり高村の感動も前出の数氏の感動も、演出された雰囲気の中で暗示されたものだと私は考えたいのだ。

ただし、この暗示は、十二月八日朝の詔書一発で日本人をとらえたのではない。その以前八十年の歴史がつちかってきたものがあったからこそ、「陛下をまもろう」「国の為に死にたくなった」となるのである。

明治以前は、神主に毛のはえたようなものにすぎなかった天皇家が、西郷、大久保、木戸らによってかつぎ出されたときは、倒幕のための旗印としてであった。西郷らに尊皇思想がなかったのではなく、尊重思想はあったけれど、彼らにとって思想は所詮、思想でしかなかった。西郷らは要するに徳川幕府を倒して新しい政府をつくればよかったのだ。天皇なんて、そのための名分をふりかざすために、彼らの軍隊を飾りたてるために利用したにすぎない。

徳川という権威に対立し得る権威として、天皇家を持ち出すより他になかったので、天皇は彼らの思うようになってくれる人物なら誰でもよかった。維新のとき明治天皇ムツヒトが、成年に達していなかったことは、西郷らにとって、むしろ好都合だった筈だ。西郷とか、木戸、岩倉などは、ひそかにムツヒトを「玉」と呼んでいた。彼らだけに通じる隠語として。

「玉」という隠語は、現在ではかなり知られていることだから、しばしば維新史関係の書物などで目にふれる。するとその度に私は、玉ころがしという別の符諜を反射的に思い出して苦笑してしまう。

「玉ころがし」という符諜は、よからぬ世界の怪し気な手合が使う言葉で、この場合の玉は娼婦をさす。上玉などといえば美人という意味だから、玉は娼婦と限定せず、女と思ってもよい。よからぬ手合にとって、自分の自由になるか、なりそうな女はすべて玉なのである。

娼婦をその抱え主の店から脱け出させ、別の店に住み替えさせて、周旋料をピンハネする行為を玉ころがしという。そんなことを常習して飯のタネにした怪し気な手合が昔はいたわけだ。今だって似たことはあるだろう。

「天皇のことを「玉」と呼んでいたというエピソードを思い出すと、先にも言ったように私は反射的に「玉ころがし」を思い出す。西郷らにとって、天皇は「玉ころがし」の玉と同じだったのではないか。こっちの玉をころがすと、みみっちい周旋料ではなくて、国家権力という、とてつもなく大きなものが彼らの手に入ったわけだ。

では、どうして玉が神になったのか。娼婦だって大富



豪の二号に変身することもあるから、この変身も不思議はないということか。

先にも書いたように、神主に毛の生えたようなものにすぎなかった天皇家を、それまで三百年の政権担当者だった徳川に対立させるためにかつぎ出した側では、天皇家こそ日本で最も尊ばれるべき家柄で、怖れ多い神の子孫であることを、大々的に宣伝しなければならなかった。

「此日本ト云ウ御国ニハ、天照皇太神宮様カラ御継ギ遊バサレタ所ノ天子サマト云ウガゴザッテ、是ガ昔カラチットモ変タコトノ無イ此日本国ノ御主人様ジャ。丁度天ニ御日様ガ二ツ無イト同ジ事ジャ。所ガ七八百年モ昔カラ乱世ガツヅイテ……北条ジャ、足利ジャノト云人ガ出テ来テ、此日本ヲヤクタイニシタガ、終ニハ天子サマノ御支配遊バサレタ所ヲ皆奪イテ己ガ物ニシタデアルナレドモ、天子サマト云モノハ、色々御難渋遊バサレナガラ、今日マデ御血統ガ絶ズ、ドコマデモ違イ無キ御事ジャ。何ト恐レ入タ事ジャナイカ」（慶応四年三月　九州鎮撫総督論書）

「天子様は、天照皇太神宮様の御子孫にて、この世の始めより日本の主にましまし、神様の御位正一位など、国々にあるも、みな天子様よりおゆるし遊ばされ候わけにて、誠に神さまより尊く、一尺の地も、一人の人民も、みな天子様のものにて……」（明治二年二月、奥羽人民告諭）

或る権威に対抗する為に、別の権威を持出すのは、思想的に固陋であるけれど、現実の手段としては、しばしば有効である。まして幕藩体制をくつがえし、封建的に分割された国家を改編統一するには、天皇という玉が是非とも必要だったであろう。

そしてまた、それを思いついた維新の推進者たちも、封建制下で生まれ育ち、旧思想の尻尾をぶら下げていた。いや、だからこそ天皇を持出すことを思いついたのであろう。

一方で倒幕の旗印として天皇を持出し、他方で尊重思想を普及する以上、新政府は天皇を帽子のようにかぶらねばならなくなる。その維新の推進力の中心だった、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、広沢真臣、横井小楠、阪本竜馬らが明治十年までに、暗殺されたり病死したりすると、新政府の中心は彼らより思想、政治力、人間的魅力に劣った二流の人物たち、黒田清隆、伊藤博文、山県有朋、松方正義らがになうことになる。彼らは自分の力量の不足を、天皇の権威を高めることでおぎなわねばならない。

ムツヒトぐらい、日本中を廻った天皇はそれ以前には

ない。しかも六大巡幸と称されるものは、明治五年、九年、十一年、十三年、十四年、十八年と集中的に行なわれている。巡幸によって人民を手なづけ、新政府の実力を誇示し、権威を高めようとしたことが、これだけからもうかがわれる。

その目的がはたされ、六大巡幸の最後の年である明治十八年から四年後に欽定憲法が公布された。それはまた、自由民権運動が弾圧と懐柔によって勢力をうしない、明治政府が自信を得た時期でもあった。

こうして尊皇愛国の思想がつちかわれていった。それは天皇ムツヒトの人間的魅力によるよりも、権力的デマゴーグによって創作されたものである。だがここまで来ると、タテマエとホンネのけじ目が、権力者自身にもつかなくなる。天皇は実際に神なのか、玉ころがしの玉なのか判らなくなる。日本人のほとんどが、天皇を現御神と崇めるようになってしまえば、権力者も今更、あれはただの旗印だとは言えまいではないか。それよりも、彼ら自身までが、天皇は神、という錯覚にとらわれたりする。

欽定憲法公布後も、日本は神の国、天皇は現御神という思想、たぶんに神がかりで独善と献身をないまぜにした、一種の宗教的感情は一般化され深められていった。

日新、日露の戦争は、戦国時代の斬り取り強盗武士のならい式なものであったが、尊皇攘夷の変型でもあった。天皇の名による戦争として忠君愛国、外夷征討の呪術的スローガンによって、国民の意思統一のキャンペーンが行なわれ、そして戦われた。しかもこの戦争に勝ったことにより、ますます天皇は神格化された。

日露戦争後の日比谷焼打ち事件は、戦争中耐乏生活を強制されて来た人民が、勝てば生活が楽になるだろうと思っていたのに、講和条件は償金支払いの要求を撤回したものと知って憤激したことから起った。期待を裏切られた人民は、国家と政府に失望したのだ。

しかし、この事件さえも権力は天皇をかくれ蓑として乗り切った。いや、政府を攻撃する人民の側が、天皇の赤子という観念にとらわれて目標を間違えた。屈辱外交だとして政府の外交政策を責めることは、軍部をはげますことになってしまった。

日本帝国はすべて、人民も領土も天皇の所有であり、政府は神である政府から政治を委任されているにすぎない、という明治欽定憲法の考え方が、人民の間に広く深く浸透していたのだ。だから政府がいくら人民から攻撃されても天皇自身は傷つかない。不忠無能な重臣高官の首さえ切れば、天皇は依然、神として安泰である。明治



の終りには天皇尊崇の愛国主義はこゝまで成長していた。

幸徳秋水らの大逆事件にしてもそうだ。天皇は神聖不可侵という憲法上のタテマエと、人民の間に天皇尊崇の念がひろまっているという前提がなかったら、あの事件は起らなかったし、あのデタラメな判決も有り得なかったのだ。むろんここには、政治権力にとっての大敵、無政府主義者を抹殺しようというホンネが最も大きく働いていたのは見逃せないが、その判決の結果は政府の威信をますます強大たらしめ、天皇をますます神たらしめたのである。

ムツヒトは、神であり、帝王である自分の立場に矛盾を感じなかったに違いない。彼に悩みがあったとすれば、どうあがいても人間は人間なのだから、生きながら神にはなれないという悩みだったであろう。それは彼自身の立場を否定することではなく、逆にいかにして神らしく振舞おうかという努力の方につながったであろう。また彼の元老、重臣、高官たちが、彼の意の如くには動いてくれないという悩みもあったであろう。しかしこの悩みも彼が天皇である自己を否定することには決してつながらなかった。

同じ悩みは三代目のヒロヒトも持ったであろうと思う。けれども、ヒロヒトも自分が神であることを否定しなかった。明治維新の推進者にかつがれて、絶対不可侵の神にして最高唯一の主権者となった祖父ムツヒトと違って、ヒロヒトは生まれながらの神の子であった（ヒロヒトが人間宣言をするのは太平洋戦争に敗けたからで、勝っていれば相変らず神として人民の上に存在し続けたであろう）。

ヒロヒトが生まれながらの神の子なら、昭和の日本人民は、生まれながらに天皇尊崇の念を抱かされた不幸な人民であった。彼らもまた敗戦という大ハンマーで一発ガンとやられなければ目のさめぬ迷妄の中にいた。

二・二六事件は尊皇を旗印に、君側の奸をしりぞけようとした青年将校の決起であったが、「朕の重臣を殺した者を許せぬ」というヒロヒトの言葉で処断された。クーデターを起した側も、起された側も天皇神聖を少しもうたぐっていないのだ。

昭和十六年といえば、明治元年からかぞえて七十五年ほどになる。維新の推進者はとうに故人となり、世代は何度も交替している。明治維新は、この時点ではもはや神話となっていて、日本人の皇室尊崇はぬぎさしならぬほどに定着している。

まして明治生まれの老人たちにとっては、東洋の一小島国から世界の一等国に日本がのしあがったという事実

を体験している。それは彼ら老人たちの努力の結果であり、天皇家はそのシムボルという気持さえある。

その時点で、先にも書いた日本を取巻く重苦しい国際情勢を背景にして、真珠湾の戦果というおまけつきで、勇壮な「軍艦マーチ」と、それを聞くと国の為に死にたくなるような「海行かば」をテーマミュージックとして、まさに舞台効果満点で宣戦が布告されたのである。

「こんな嬉しい、こんな痛快な、こんなめでたい」と感動し、「絶対信頼出来る皇軍をもったのは幸福」と手放しで涙を流すような言葉が出て来ても不思議はない。それもこれも天皇尊崇、忠臣愛国の思想が、明治以来広まり深まっていたからだ。天皇の命令なら、いつでも死なねばならぬというファナティズムの中に日本人がいたからだ。

片道だけの燃料を積んで飛び立ち、飛行機もろとも体当りする特攻攻撃も、その尊皇思想あればこそであった。天皇の名による戦争だから日本人は、一億一心火の玉にもなれたのだ。

「高見順日記」の八月十五日の項に次のような一節がある。

「（いわゆる玉音放送を前にして）『ここで天皇陛下が、朕とともに死んでくれとおっしゃったら、みんな死ぬわね』と妻がいった。私もその気持だった。ドタン場になってお言葉を賜わる位なら、どうしてもっと前にお言葉を下さらなかったのだろう。そうも思った」

戦後三十年たった今になって、ヒロヒトはあの戦争は自分の意思ではなかったと、いけしゃアしゃアと言うのだ。どれだけの人が死に、どれだけの人が傷つき、どれだけの人が家を焼かれ、どれだけの人が家族をうしなったかしれないというのに。

外人記者とのインタビューでのヒロヒトの発言は、彼の最も忠良な臣民をさえ裏切る言葉であった。とても正常な神経を持つ人間の言える言葉ではなかった。

彼は戦争についての彼自身の責任を、おくればせとは言え、人民の前に明らかに心から謝罪すべきであった。それなのにヒロヒトは開戦の責任を逃れようとしただけでなく、終戦による平和は自分の手柄だと、白を黒と言いくるめようとしている。しかも憲法まで持ち出して。

（次号完結）



# アナキズムと盗奪企業爆破事件

大島　英三郎

アナキズムは、今、社会の地下に非常な勢いで発育しつつあります。それは現代の情況が地下に根をのばすのが最良だからです。しかし地下とはいえ、アナキズムは生命の運動ですから、時にはその呼吸が地表にも現われます。そのひとつが今度のアナキスト斎藤和君ら、東アジア反日武装戦線の盗奪企業爆破事件です。

盗奪企業は社会を食い荒らし、国家機関やマスコミを思いのままに操作して私たちを家畜のように扱い、さらに第三・第四世界にまで盗奪に出かけ、そこの買弁政権と親密な関係を保つことによって私たちをも加害者にしてしまったことは明らかなことです。特に朝鮮半島に対しては、明治以来の罪悪を悔い改めるどころか更に加害しつつある現状です。

斎藤君らは、この人類を死に追い込むガンである盗奪企業の摘出手術を決行したのです。それは人体内の病菌を白血球が食い殺すのと同じで、人間の自救活動といえましょう。要するに彼らは社会の外科医といえるのではないでしょうか。アナキズムの場である家庭も生命を投げ捨てて、私たちに自立を呼びかけたのですから、絶対自由・万人平等・人類愛の殉道者といえないでしょうか。

「一粒の麦・地に落ちて死なずば……」というように、幸徳秋水大杉栄らの死によって日本のアナキズムは生長しました。そして今また、斎藤君らは、本棚におかれていた思想を、万人が感触できる生きたものに変えてくれたのです。

クロポトキンは「叛逆者の言葉」の中で、「一個の行動はよく百千のパンフにまさる」といっております。講壇化、サロン化、セクト化したアナキストは、いまこそアナキズムの真の姿に回帰して、個々の思想を実践で示すべきです。

盗奪企業の番犬である警察やタイコもちのマスコミは、三菱重工の爆破で死傷者が出たことをもって、東アジア

反日武装戦線を「社会の敵」と非難します。しかし、爆破を電話で予告していること。調合の誤算から予想以上の爆破となったため、以後、小型のものにし死者を出さなかったこと。そして「自死」の意志であったことなどを考えれば、ベトナム戦争などで暴利を得、また環境破壊を、公害で人間を殺し続けている盗奪企業の罪悪が、比較できない重大であることは万人の目に明らかなことです。

もちろん死傷者が出てしまったことは残念で、その人々を心からいたみます。それは斎藤君らにまさる人類更生の革命戦の犠牲者だと考えます。そして病巣摘出の大手術のためには、その周辺にある若干の細胞が犠牲になってしまうのは、万やむをえないことだったと思われます。

しかし…、　斎藤君らが人類永遠の健康を回復しようとして、病巣にむかって突撃した志には敬意を表しますが…、私はその手段を現段階でとることはできないのです。革命への情熱に燃えながらも家庭でも職場でも隣人に対しても、温良誠実であった東アジア反日武装戦線の人々が、別のアナキスト革命の方向で献身されたならば、と思うと残念でたまりません。アナキスト運動は多種多様です。その理論を万人に説得力をもつように完成する研究者になってくれたら…大衆の日常生活のために奔走する組織活動家になってくれたら……など考えると胸がかきむしられます。

人類の天性であり自然である―社会を組織して幸福な生活を営む本能―社会性、創造的組織力は、今なお太古の原生林のような清純と強大さをもって人類の心の奥底に厳然と存在し、噴出することを私たちは斎藤君らによって教えられ示されました。社会のガンである盗奪企業に攻撃を加え根絶する―革命―は、この社会性の大活動のほかありません。

国家と盗奪企業は、太平洋戦争によって何千万人の死傷者を出しました。私たちはその元凶天皇の戦争責任について、刑罰をもってせず、ただ天皇制の廃止を求めているだけです。

東アジア反日武装戦線の行動は、実は、このような盗奪企業とその番犬である暴力国家が行ってきた大犯罪が誘発したものです。しかも彼らは東アジア反日武装戦線の同志たちを捕え、処刑しようとしています。この爆破事件について彼ら権力者が、東アジア反日武装戦線の同志を裁き、処罰する真の権利はない。私は権力者のまず自己への反省を要求します。そしてそれは、人間解放の



社会革命においては、ただ一人の死傷者も出ないのを理想とするからなのです。私たちは国家権力の法律テロを阻止し、監獄の廃止を要求します。

アナキストは、商業主義のマスコミやジャーナリズムの利用を卑しみます。名声を求めたり、権勢や利益を欲したりするものは、アナキストになぞならない。アナキズムの戦線には多くの純情の人、有能の人、誠実熱心の人がいるにもかかわらず、世間的に無名です。有名になろうとしない。それはアナキズムは社会の中に溶解し、人類の間に同化するのが本質だからです。しかし、運動の現情況はこれらの同志が社会の表に現われていただかねばならなくなりました。今、新らしい安藤昌益、権藤成卿、新らしい幸徳、大杉、野枝、文子らが生まれ多種多様の新運動が展開しようとしているからです。

殉道者の血と活動家の涙が雨とそそがれ、反権力の正義の太陽の光が照ってこそ、革命の花は咲く……。それ花咲くことは死を意味することであるとも、その果実は大衆の楽園、共産村に結ばれます。社会正義の陽光もなく、殉道者・活動家の涙もなくして、知識人らの支配欲の満足のために、結社組織と指導者によって革命を自称する強権主義者を誤信してはなりません。

私たちは叫ぶ。それは大衆を指導するためではなく、叫ばないではいられないからです。私たちは戦う。それは大衆を支配するためではなく、私たちの精神の奥底の社会性―創造的組織力が戦わずにいられなくするからです。

東アジア反日武装戦線の武闘は人類歴史の偉大な記録であり、アナキズムのおのずからな噴出であります。斎藤君らは、アナキスト革命の可能性と正当性を、身命を投げ捨てて証明してくれたのです。彼らの思想と行動は、永遠に全人民の総決起・総破壊・総建設の戦闘を鼓舞してやまないでしょう。（決定稿文責　大島英三郎）

---

この裁判は今後、長期にわたるもの、と思われます。私たちも、独自の立場から救援活動をおこし続けていきたく、みなさまのカンパを要請します。

送金は、振替口座、宇都宮一一〇一五、黒色戦線社

（〒372 群馬県伊勢崎市中町和田・大島英三郎方）電話〇二七〇―二四―〇七七六へ第2・第4日曜日は電話〇三―七三五―一二四六。〒144 東京都大田区西蒲田七丁目六一番八号　エンリコビル四階　共学読書室へ